

主題	都市型逆デイサービスを通した「個族の時代」の高齢者の地域ネットワークづくり		
副題	～「ほほえみ交流事業」100ヶ月のあゆみから目指すもの～		
地域と施設の繋がり		個族の時代のネットワークづくり	
研究期間	100 か月	事業所	特別養護老人ホーム 原町ホーム
発表者：深澤 あゆみ（ふかさわ あゆみ）		アドバイザー：佐々木 末廣（ささき すえひろ）	
共同研究者：小林 あゆみ・富谷 茉由・前田 千紗子			
電 話	(03) 3359-5651	メール	E-mail: haramati-k@douen.jp
F A X	(03) 3359-5520	U R L	URL: http://www.douen.jp/index.html

今回発表の事業所やサービスの紹介	社会福祉法人恩賜財団 東京都同胞援護会が母体である 50 床の特別養護老人ホームです。 施設のコンセプトは「やさしさを起点としたパーソンセンタードケアによる安心と信頼のホーム」であり、一人ひとりの心に寄り添う介護を目指しています。また、持ち上げない介護を実践し、ご利用者の心身に負担をかけない移乗方法に取り組んでいます。
------------------	--

《1. 研究前の状況と課題》

- ① 施設利用者：利用者が施設内のメンバーに限定された活動・生活をしている現実があった
- ② 地域高齢者：地域社会での活動を求めている、きっかけとなる高齢者向けの活動が不足していた

以上の観点から…

当施設では地域の人々との交流の場を持つことで、今後の施設での市民としての生活の質の向上・安定を感じられる場所の提供を行う。また、健康・カルチャー活動的要素を持った人との繋がりを形成し都市型市民として個性を尊重したネットワークを創出していかなければならないという課題があった。

《2. 研究の目標と期待する成果・目的》

- ① 施設入所者に対して
施設という限られた空間だけではなく、地域社会での交流を通じて普通の市民生活を実感出来る環境を提供する。
- ② 地域の方に対して
都市の高齢住民に社会とのほほえみのあるネットワークを築き、地域社会の中で一人でも豊かな連帯感が実感できる「個族の時代」にふさわしい環境を提供する。

以上の目標から…

成果として地域の方々・施設のご利用者との双方にコミュニケーションが生まれ、施設に入所されている利用者の本当の意味での、市民としての生活の質の向上（Citizen QOL）・状態の向上、維持に繋がるように期待する。

【地域ほほえみ交流事業とは？】

当施設では、平成 16 年度より都市型逆デイサービス「ほほえみ交流事業」と称した地域高齢者との交流事業を行っている。毎週木曜日に施設利用者と地域高齢者 10 名程が一つの場所に集まり、華道・書道・手芸（作業）・リハビリ体操の 4 つの項目で活動を行っている。

《3. 具体的な取り組みの内容》

100 ヶ月間継続してきた中で最新の内容を報告する。

- ① 対象者：施設入所者 50 人中 25 人参加する。
- ② 具体的手法：華道・書道・手芸（作業）・リハビリ体操
- ③ 期間：平成 23 年 4 月 1 日～平成 24 年 3 月 31 日。週 1 回で月に 4 回、年間で 48 回行っている。
- ④ 手順：最初に利用者全員にどのクラブに参加したいかの希望（アンケート）を取る。一人一人の希望に沿い活動に参加して貰う。
- ⑤ 職員数や構成：介護職より各クラブ 2 名ずつ計 8 人で担当し交互に行う。手芸以外は講師を招き担当して頂く。参加する利用者の体調を医務が判断。また、地域の方には、施設より連絡をしてその日の状態を把握する。そして、開始前に担当職員でミーティングを行い状態報告する。

⑥ 必要とした道具や費用

華道：華道道具一式 花の代金のみを¥1000 実費で負担

書道：書道道具一式 半紙のみ¥100 実費で負担

手芸：手芸道具一式 手芸専用の会社より物品購入 ¥300～600 実費で負担

リハビリ体操：マット・バランスボール 参加費用は無料

⑦ ポイントとなった点

短期目標：ADL・QOLの向上・維持（予防）

長期目標：逆デイに参加することによって認知症の予防。

《4. 取り組みの結果と考察》

『地域ほほえみ交流事業』にて提供している内容は、華道・書道・手芸・リハビリ体操で、100 ヶ月実施してきたが、毎年前年度に比べて、参加者は増え続けている。

また、全介助の方が参加する回数を増やしていくことにより、自分から作業を進んで行える状態まで回復している。そして、言語障害もあり地域との関わりが全くなかった利用者に関しても同様に進んで作業を行い、作業始めに自己紹介をする場を設けたことで施設内でも発語が多く聞かれ、他利用者、地域の方とのコミュニケーションを取れるようにまでなった。また、最初は消極的参加のご利用者だったが、地域の方、他利用者と参加することにより、施設入所者から普通の市民としての生活感覚へ戻り始め QOL・ADLの向上に繋がった。

《5. まとめ、結論》

『地域ほほえみ交流事業』を100ヶ月間行ってきた事で、利用者一人一人が自分を地域の市民として必要とされている事を認識し、目標を持つ事で生活の質の向上・全身機能の向上を望める。また、来年の3月には高齢者の為の地域交流室を本法人の事業として開設するので、原町ホームがこれまで以上に地域福祉の視点から地域と連携し『地域ほほえみ交流事業』を逆デイサービスから地域高齢者のほほえみ交流ネットワークへと拡大・深化して提供できるのではないかと思います。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に書面にて確認をし、本研究発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

原町ホーム

- ・「中・長期経営計画」
- ・「アンケート分析結果報告書」

《8. 提案と発信》

地域ほほえみ交流事業を通して、多くの高齢者が生き生きと生活することが出来るよう多くの事業所に取り組んで頂きたい。また、このような取り組みを行う事で、地域とより密着し、開かれた施設になれば良いと考えている。

【メモ欄】